

【研究ノート】

井泉水編『一茶俳句集』入集の句 (七)

黄 色 瑞 華

凡 例

- 一 一行めに、井泉水編『一茶俳句集』の本文をおく。ただし、漢字は現行文字とし、ルビは省略した。
- 二 二行めに、出典を示し、句帳・紀行などは()内にそれが記されている条の年月を示した。年号は改元の月日にかかわらず元年一月からとした。
- 三 原本と表記が異なるものは、出典の次の④に原本のそれを示した。
- 四 注は、「前書」の異同と、他書との異同を示すにとどめた。
- 五 原典は、主として一茶全集本により、『浅黄空』などは一茶叢書本その他によった。また、『八番日記』は風間本により、特に異同がある場合、梅塵本と対照した。

冬 (承前)

寒 空

箱根六道辻

寒空にはなれぐや菩薩達 (花見の記)

出典 未詳

㊦ 「花見の記」（文化5・3、一茶叢書その他に翻刻）にこの句はない。

木 枯

木がらしや門に見えたる小行燈 （享和三年）

出典 享和句帳（享和3・12）

木がらしや壁の際なる馬の桶 （享和三年）

出典 享和句帳（享和3・12）

㊦ 前掲句の二句前に出。

木がらしや枕元なる淡ぢ島 （享和三年）

出典 享和句帳（享和3・10）

㊦ 中七「枕元なる」「枕にとどく」両案併記。この句の二句前に、中七「隣といふは」。

木がらしや鋸屑けぶる辻の家 （享和三年）

出典 享和句帳（享和3・10）

㊦ 前掲句の直前に出。

吉備八十八坂

木がらしやこの坂過る今の人 （享和三年）

出典 享和句帳（享和3・12）

㊦ 「木がらしや壁の際なる」の八句前に出。

木がらしやこんにやく桶の星月夜 （文化元年）

出典 文化句帳（文化1・11）

木がらしの日なたに立や真乳山マムラ（文化三年）

出典 文化句帳（文化3・11）

木がらしに大事く月の夜哉（文化七年）

出典 七番日記（文化7・10）

木がらしや雀も口につかはるる（文化七年）

出典 文化三十八年句日記写（文化7・10）・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 座五「つかはるゝ」。

立砂十三回忌、墓前にて

木がらしやはは仏の二日月（文化八年）

出典 我春集（文化8）

㊦ 前書は井泉水。我春集には、「何として忘ませうぞかれ芒」以下十三句を列記して、「墓の前にて手向心の十三句也。人に聞すべきものにあらねば、草葉の陰に穴をほりていひ入ぬ」とある。

木がらしや鎌ゆひつけし竿の先（文化九年）

出典 七番日記（文化9・10）・自筆句集

木がらしや鉄砲かつぎて小脇差（文化十二年）

出典 七番日記（文化12・11、14・1）・自筆句集北

㊦ 七番日記（12・11）、中七「砲鉄（鉄砲）かつぎて」。七番日記（14・1）、中七「鉄砲（砲）かつぎて」。

北壁や嵐木がらし唐がらし（文化十三年）

出典 七番日記（文化13・10）

⑩ 自筆句集、上五「軒下や」。

木がらしや軒の虫籠釣し柿（文化十四年）

出典 七番日記（文化14・9）

木がらしや物さしさした小商人（文化十四年）

出典 七番日記（文化14・9）

木がらしや木の葉にくるむ塩肴（文化十四年）

出典 七番日記（文化14・12）

⑪ 中七「木「の」葉にくるむ」。

木がらしや行抜路次の上総山（文政二年）

出典 八番日記（文政2・10）・嘉永版発句集

⑫ 前書「芝浦」。梅塵本八番日記（2）、前書「芝浦」。上五・中七「凧や行ぬけ道の」。

木がらしや折助帰る寒さ橋（文政二年）

出典 八番日記（文政2・10）・おらが春・発句鈔追加

⑬ 風間本八番日記、中七「折助帰れ」。梅塵本八番日記、中七「折助帰る」。自筆本句集、中七「折介もどる」。

護持院原

木がらしや廿四文の遊女小屋（文政二年）

出典 八番日記（文政2・10）・おらが春・発句鈔追加

⑭ 風間本八番日記、座五「遊女小家」

木がらしや火のけも見へぬ見付番 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・10)

㊤ 八番日記(2・10)、中七「脇目もふらぬ」(別案)。

木がらしや隣といふも川向ふ (文政四年)

出典 八番日記(文政4・9)

㊤ 八番日記(2・12)、座五「多ちご山」

木がらしや門の榎の力瘤 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・10)

㊤ 上五「木がらし」[や]。

木がらしになほ住吉の御燈哉 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・10)

木がらしやご持院原のあまざけ屋 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・10)

㊤ 中七「ご持院原の」。

冬日向

かり家や村一番の冬日向 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)

三巡りの日南ミナミほこしに出たりけり (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・11)

㊦ 中七「日向ぼこしに」。

人形が薬挽く也冬日向 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)

㊦ 梅塵本八番日記(2)、上五「人形の」。

雪

雪の山何を鳥の親にあたふ (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

初雪のふはくかかる小鬢哉 (享和元年)

出典 享和句帳(享和3・10)

㊦ 前書「無心所着」。中七「ふはくかかる」。

はつ雪のかかる梢も旅の家 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

㊦ 中七「かかる梢も」。

はつ雪や翌のけぶりのわら一把 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・11)

只居ればおると雪の降にけり (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・11)

㊦ 上五「只居ば」。

はつ雪やかさい鳥がうかれ鳴 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・11)

④ 中七以下「カサイ鳥がう(葛西)「か」れ鳴」。

心からしなの雪に降られけり (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・11)

④ 中七「しなの雪に」。

雪ちるやしなの国の這入口 (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・12)

④ 中七「しなの国の」。

雪ちるや七十顔の夜そば売 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)

④ 上五「雪ちる「や」」。

東本願寺御上棟

はつ雪をいまくしいと夕哉 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)・八番日記(文政3・10)・文政三年十二月八日付春甫・掬斗・素鏡・雲士あて書簡所

収「俳諧寺記」・自筆句集

④ 八番日記、「はつよきをいまくしいといふべ哉」。(中) 俳諧寺記、「初雪をいまくしいといふべ哉 旅人」。(中) 前書、八番日記・俳諧寺記・自筆句集ともなし。

はつ雪や荒神さまの姫小松 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)

⑥ 七番日記 (10・11)、上五・中七「はつ雪〔や〕大黒棚の」。
わらの火のへらく雪はふりにけり (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・11)

雪ちるや鳥もかまはぬ女郎花 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・11)・文化十三年十二月二十日付笹人あて書簡

初雪や鶏の朝声浅草寺 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・11)

十二月廿四日、柏原に入

是がまあつひの栖か雪五尺 (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・11)・句稿消息・自筆句集・文政版発句集・一茶翁終焉記・嘉永版発句集

⑦ 七番日記 (9・11) の記事に、「廿四晴 柏原ニ入」。句稿消息、「十二月廿四日 古郷ニ入」として、「ほちやくと雪にくるまる在所哉」「行としやかぶつて寝たき峰の雪」とともに収む。中七「つひの栖か」「死所かよ」の両案を記し、後者は朱で消す。成美の評は「極上々吉」。自筆句集、前書「柏原を家所定て」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「十二月廿四日古郷に入」。中七「終の栖か」。終焉記、中七「終の住家か」。

ほちやくと雪にくるまる在所哉 (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・11)

⑧ 句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集、上五「ほちやくと」。

雪ちるやきのふは見えぬ明家札 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・10)・句稿消息・志多良 (文化10)・自筆句集。

⑨ 七番日記・句稿消息・志多良、中七「きのふは見えぬ」。自筆句集、前書「石上の住居は」、中七「きのふは見えぬ」。

三韓人(一茶・成美・一瓢・諫圃半歌仙)、前書「石の上の住居のこゝろせはしさよ」、中七以下「きのふは見えぬ借家札」。文政版発句集、前書「石の上の住居のこゝろせはしさよ」、座五「借家札」。嘉永版発句集、前書「石の上の住居のこゝろせはしさよ」、中七以下「きのふは見えぬ借家札」。

はつ雪や犬が先ふむ二文橋 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)

はつ雪やとある木陰の神楽笛 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・11)

はつ雪や平内堂の小豆飯 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・11)

㊤ 自筆句集、座五「赤の飯」。

御ひざに雀鳴く也雪仏 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・閏11)

㊤ 上五・中七「御ヒザに雀鳴也」。

はつ雪やちりふの市の銭吠 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・11)

㊤ 上五「はつ雪[や]」。七番日記(10・閏11)、座五「銭の山」。

はつ雪や吉原駕のちうをとぶ (文化十年)

出典 七番日記(文化10・12)

雪の日や天井張らぬ大御堂 (文化十二年)

出典 七番日記（文化12・11）

雪ちるやきのふ出来たる湯の烟（文化十四年）

出典 七番日記（文化14・10）

⑨ 前書「妙光山^高」、座五「湯〔の〕烟」。

はつ雪や江戸もわらやのあればこそ（文化十四年）

出典 七番日記（文化14・10）

⑩ 中七「エドもわら家の」。

はつ雪や今重たる庵の薪（文政元年）

出典 七番日記（文政1・10）

闇の夜の初雪らしやぼんの凹（文政元年）

出典 七番日記（文政1・10）

⑪ 上五「闇夜の」。座五「ボンの凹」。

はつ雪やことに夜明の角田川（文政元年）

出典 七番日記（文政1・10）

⑫ 前掲句の直前に出。

小松菜の一文東や今朝の雪（文政二年）

出典 八番日記（文政2・10）

⑬ 座五「けさの霜」。嘉永版発句集、中七以下「一文把や今朝の霜」。

雪の日や仏お竹が縄だすき（文政二年）

出典 八番日記（文政2・10）

㊤ 梅塵本八番日記（2）、座五「繩すだれ」。

雪ちるやおどけも言へぬ信濃空 （文政二年）

出典 八番日記（文政2・12）・おらが春・文政三年十二月七日付斗圍あて書簡

㊤ おらが春・斗圍あて書簡、中七以下「おどけもいへぬしなの空」。梅塵本八番日記、座五「信濃山」。文政二年十二月十五日付・同十二月二十四日付文路あて書簡・文政九・十句帳写（9）、中七以下「おどけもいへぬしなの山」。自筆句集、中七以下「おどけも言へぬしなの山」。

初雪を着て戻りけり秘蔵猫 （文政三年）

出典 八番日記（文政3・12）・文政三年十二月七日付斗圍あて書簡

㊤ 風間本八番日記、中七「着て戻りける」。

初雪や雪駄ならして善光寺（文政四年）

出典 八番日記（文政4・10）・自筆句集

初雪や一二三四五六人（文政四年）

出典 八番日記（文政4・12）

初雪や御駕へ運ぶ二八そば（文政四年）

出典 八番日記（文政4・11）

㊤ 上五「はつ雪や」。

雪ちらく一天に雲なかりけり（文政四年）

出典 八番日記（文政4・12）

㊤ 自筆句集、中七「一天雲は」。

雪掃や地蔵菩薩のつむり迄 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・12)・自筆句集

⑧ 自筆句集、座五「つむり迄」。

雪ふるや脇から見たら栄耀駕 (文政四年)

出典 一茶翁終焉記・文政版発句集・嘉永版発句集

⑨ いずれも上五「雪ちるや」。

むまさうな雪がふうはりくくと

(文政版
一茶発句集)

出典 文政版発句集・嘉永版発句集

⑩ 七番日記(文化10・閏11)・句稿消息、中七以下「雪がふうはりふはり哉」。一茶・素外・一把三吟歌仙(文政7冬)、「味そふな雪やふうはりく」と。自筆句集、上五・中七「うまさふな雪やふふはり」。希杖本発句集、「むまさふな雪がふうわりく哉」。

田中河原

降雪やわき捨てある湯のけぶり (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・12)

⑪ 文政句帳、「田中河原といふ所は、田のくろ、あるは石の下より、めでたき湯のむくくと出て、いたづらに流れちりぬ。あはれ此ものゝ常の所に俄に出たらんには、地獄にて仏に逢ふよりもうれしからましを、此里人は湯ともいはざりけり」に、この句を添える。だん袋、前書「田中河原」、上五「雪ちるや」。発句鈔追加、前書「河原湯」、「雪ちるや湧捨てある湯の烟」。

雪菰や投込んで行とどけ状 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・10)

㊦ 座五「とどげ状」。

はつ雪や駕をかく人駕の人 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・10)

雪ちらりく見事な月夜哉 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・11)

大門や雪に並べる飴おこし (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・11)

初雪や俵の上の小行燈 (文政十年)

出典 ほしなうり(文化9)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ ほしなうり、上五・中七「はつ雪や俵のうへの」。

はつ雪や今行く里の見へて降る (文政版
一茶発句集)

出典 文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 文政版、座五「見へて降」。嘉永版、中七以下「今行里の見えて降」。

霰

遠乗や霰たばしるかさの上 (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

衛士の火のますくもゆる霰哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

能登殿の矢先にかかる霰哉 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・11)

⑥ 中七「矢先にかゝる」。

玉霰夜たかは月に帰るめり (文化七年)

出典 七番日記(文化7・12)

⑥ 中七「夜タカは月に」。

霰ちれくくり枕を負ふ子ども (文化十年)

出典 七番日記(文化10)

⑥ 文化九年五月の条末にある「文化十年九月・十月」の部に出。中七「くくり枕」。

かさ守のおせん出て見よ玉霰 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・10)

身一つにあらし木がらしあられ哉 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・11)

⑥ 上五「身一ツに」。

湯田中

三絃のばちで掃きやる霰哉 (文政五年)

出典 温泉之記(文政5・12)

⑥ 「湯田中」は井泉水の注。温泉之記には、「湯のある所は山陰ながら、糸竹の声常にして、老の心もうき立て、さな[が]ら仙窟[に]入りしもかくあらんと覚ゆ。十娘五嫂の舞ひ、遊女くゞつ[の]声、時ならぬ花の咲心ちす。彼上人のほさつと見給ふもむべなる哉。此楼に上れば、一時に衆苦を忘る。ふしぎの別世界也けり」とあって、この句を添える。発句鈔追加、前書「相の山」、「三味線の撥であしらふあられ哉」。

霜

朝霜や肩衣かけて通る人（寛政五年）

出典 寛政句帳（寛政5）

㊦ 中七「肩絹（衣）かけて」。

朝霜に潮を散す宮居哉（寛政六年）

出典 寛政句帳（寛政6）

一人前菜も青みけりけさの霜（享和三年）

出典 享和句帳（享和3・8）

㊦ 前書「山雷頤」（サンライイ）、中七「菜も青「み」けり」。

けさの霜（霜）の梅（梅）のこやし（こやし）に何よけん（文化三年）

出典 文化句帳（文化3・10）

おく霜や白きを見れば鼻の穴（文化八年）

出典 七番日記（文化8・10）

はつ霜やかた衣かけてさす小舟（文化八年）

出典 七番日記（文化8・11）・我春集

初霜の右は元三大師哉（文化十一年）

出典 七番日記（文化11・10）

はつ霜の草へもちよいと御酒哉（文化十二年）

出典 七番日記（文化12・10）

はつ霜や並ぶ花売鉦たたき (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

縄帯のメリかげんやけさの霜 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・11)

霜どけや二番坂なる朝談義 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・10)

小松菜の一文束やけさの霜 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・10)・嘉永版発句集

朝霜や歯磨売ときらず売 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・10)

⑩ 風間本、座五「き^(ら)らず売」。梅塵本、座五「きらずうり」。

張番に庵とられけり夜の霜 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・12)・おらが春・自筆句集

⑪ おらが春、前書「強盗はやりければ」。

さをしかやゑひしてなめるけさの霜 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・9)・おらが春・文政三年十二月七日付斗圍あて書簡・文政版発句集・嘉永版発句集。

⑫ 梅塵本八番日記(2)、上五「さをしかの」。

善光寺

朝霜やしかも子供のお咲売 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・10)・だん袋

⑤ 風間本八番日記、中七「しかも子どもの」。梅塵本八番日記(3)、中七以下「しかも子供の御花売」。だん袋、「九月七日会・善光寺堂前」と前書した三句中の第二句、中七以下「しかも子どもの御花売」。

空色の山は上総か霜日和 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・10)

宿銭におく浄るりや夜の霜 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・7)

枯野

遠方や枯野の小家の灯の見ゆる (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

かくれ家に日のほかく／＼とかれの哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・12)

戸口迄ついと枯込む野原哉 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)

大珠数を首にかけたるかれの哉 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・10)

⑥ 上五「大珠数(数珠)を」。

五六疋馬干しておく枯野哉 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・10)

⑤ 風間本、上五「五六足」。^(定)梅塵本、「五六足馬ほしておく枯野かな」。
なでしこの咲につけても枯野哉 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・12)

⑥ 中七「咲に付ても」。

枯原や夫婦六部が捨念仏 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

⑦ 上五「木がらしや」「枯原や」の二案を併記。

雉立て人おどろかすかれの哉 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・9)

氷

せせらぎや氷を走る炊ぎ水 (寛政六年)

出典 寛政句帳(寛政6)

⑧ 上五「せゝなぎや」。

我家の一つ手拭氷りけり (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・10)

⑨ 上五「我家〔の〕」。

おさな子や文庫へ仕廻ふはつ氷 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・12)

⑩ 座五「古曆」をミセケチにして「はつ氷」。文政七年十二月二十八日付雲土あて書簡、「^(を)おさな子の文庫〔へ〕仕廻ふ氷

かな。

御影講

こんによくも拝まれにけり御影講 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

⑨ 「御影講」(弘法大師忌)は、陰曆三月二十一日。「御影講」は春の部に入るべきもの。

達磨忌

達磨忌や傘さしかける梅の花 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・10)

達磨忌や箒で書し不二の山 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・10)・発句鈔追加

⑩ 七番日記、前掲句の直前に出。

神の旅

鳶ひよろひよろ神の御立げな (文化十二年)

出典 文化十二年十月七日付魚淵あて書簡・希杖本句集

⑪ 希杖本句集、中七「ひよろく」。七番日記(12・10)、上五・中七「鳶ヒヨロヒヨロ神の」。西歌仙(文化13夏序)所収一茶・一瓢両吟半歌仙(文化12・10成)、中七「ひよろ神も」。稿本発句題叢、座五「お立やら」。自筆句集、中七「ひよろ神の」。ありのまま(文政1・9奥)、中七以下「ひいよろ神も御立やら」。文政版発句集、上五・中七「鳶ひよろひよろ神の」。嘉永版発句集、上五・中七「鳶ひよろひよろ神の」。発句鈔追加、中七「ひよろ神も」。

十夜

もろもろの愚者も月見る十夜哉 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・10)

㊤ 上五「もろくの」。八番日記(3・10)、中七「愚者も月夜の」。自筆句集、上五・中七「もろく」の「愚者も月夜の」。

田の中についてと道つく十夜哉 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・10)

㊤ 上五「田」の中に。

御十夜は巾着切も月夜也 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・6)

㊤ 嘉永版発句集、座五「月夜かな」。

念仏の十夜が十夜月夜哉 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・冬)

㊤ 文政七年閏八月の条末の「冬の部」に出。

かまくらや十夜くづれの明烏 (だん袋)

出典 だん袋・発句鈔追加

㊤ 発句鈔追加、上五「鎌倉や」、座五「明がらす」。

芭蕉忌

ばせを忌や丸こんにやくの名所にて (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・10)

十日月時雨奉る御宝前 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・11)

⑤ 上五「十月や」。

芭蕉忌や鳩も雀も客の数 (文政四年)

出典 梅塵本八番日記 (文政4)

⑥ 風間本八番日記 (4・10)、座五「客めかす」。

ばせを忌や昼から錠の明く庵 (文政八年)

出典 文政句帳 (文政8・11)

夷講

梅さげし人しばしとやえびす講 (文化三年)

出典 文化句帳 (文化3・10)

⑦ 全集本発句篇「七番日記・文化三」と誤る。

爪に灯をとほしおふせて夷講 (文政七年)

出典 文政句帳 (文政7・12)

輔祭

里並に藪のかぢ屋も祭哉 (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・10)・嘉永版発句集・発句鈔追加・類題集

⑧ 文化句帳、前書「閑田 上毛皿割男」。嘉永版発句集、中七以下「藪の鍛冶屋も祭かな」。発句鈔追加、中七以下「藪の鍛冶屋も祭り哉」。稿本発句題叢、上五・中七「町並〔に〕藪のかぢやも」。

小豆粥大師の雪も降にけり (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・11)

㊤ この句、「大師講」と季題を別に立てるべきもの。

里神楽

夜神楽や焚火の中へちる紅葉 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

御神楽や塘を弘げる雪の上 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・11)

鉢 敲

京を出て聞直さうぞはち敲 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・11)

細長い雲のはづれや鉢たたき (文化八年)

出典 七番日記 (文化8・11)

㊤ 座五「鉢たゝき」。

鶯に目を覚さすな鉢たたき (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・11)・自筆句集

㊤ 七番日記、座五「鉢たゝき」。自筆句集、中七以下「目を覚〔き〕すな鉢たゝき」。

寒垢離

寒ごりに袖すりてさへ寒哉 (文化三年)

出典 文化句帳 (文化3・12)

寒垢離にせなかの龍の披露哉 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)・おらが春・文政三年十二月七日付斗圍あて書簡・発句鈔追加

⑤ 八番日記、文化2・10に重出。おらが春、前書「两国橋」、上五「寒垢離ニ」。斗圍あて書簡、前書「两国橋」。発句鈔追加、前書「两国橋」、中七「背中の竜の」。嘉永版発句集、上五・中七「寒垢離の背中に竜の」。

寒念仏

一文に一つづつかよ寒念仏 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)

⑥ 中七「一ツツゝかよ」。自筆句集、中七「一つづゝ也」。

そつくりと大津の鬼や寒念仏 (文政二年)

出典 八番日記(文化2・10)

真黒な藪と見へしが寒念仏 (文政十年)

出典 文政九・十年句帳写(文政10)

寒念仏さては貴殿でありしよな (文政版一茶発句集)

出典 文政版発句集・嘉永版発句集

⑦ 嘉永版発句集、座五「有しよな」。

口切

よい雨や茶壺の口を切る日とて (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・11)

⑧ 座五「切「る」日とて」。

炉開

炉開や勸学院の鳩雀 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・10)

炉開やあつらへ通り夜の雨 (文化十一年)

出典・七番日記 (文化10・10)・志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 自筆句集、中七「拵へ通り」。

開く炉に峰の松風通ひけり (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・10)

ひだ山の入日横たふいろり哉 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・11)

㊦ 上五「ヒダ山の」。この句、「いろり」と季題を別に立てるべきもの。

煤 払

かつしかや煤の捨場も角田川 (文化三年)

出典 文化句帳 (文化3・12)

すす払藪の雀の寝所迄 (文化四年)

出典 文化句帳 (文化4・12)

㊦ 上五「すす払」。

すす竹や先鷺の鳴ところ (文化五年)

出典 文化五・六年句日記 (文化5・12)

㊦ 上五「すゝ竹や」。

すす掃て長閑に暮るる菜畠哉 (文化五年)

出典 文化五・六年旬日記 (文化5・12)

㊧ 上五・中七「すゝ掃て長閑に暮る」。前掲句の三句前に出。

夕月や御煤の過し善光寺 (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・11)・嘉永版発句集

㊨ 句稿消息・文政版発句集、上五「名月や」。

それ遊べ煤もはいたぞ門雀 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・11)

㊩ 中七「煤もハイタゾ」。

煤掃いて垣も洗つて三日の月 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・12)

㊪ 七番日記、「煤掃て垣も洗て三ヶの月」。自筆句集、「煤はいて松も洗て三ヶの月」。

長閑さや煤はいた夜の小行燈 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・10)

㊫ 風間本、中七「煤はとゝ^{いた}夜の」。梅塵本、中七「煤掃た夜の」。

煤はきや東は赤い日の出空 (文政六年)

出典 文政句帳 (文政6・11)

節季候

せき候や七尺去て小せき候 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・11)・句稿消息・稿本発句題叢・自筆句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊸ 句稿消息・発句題叢・文政版発句集・嘉永版発句集、上五「節季候」。

せき候やはるく帰る寺の門 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)

㊸ 風間本、中七以下「はか^(る)く帰る馬^(寺)の門」。梅塵本、上五「節季候や」。

せき候や長大門の暮の月 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・12)

餅 搗

松ありて又松ありて餅の音 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

餅つきや一足づつに京の空 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・11)

㊸ 上五・中七「餅つき「や」一足づつに」。

餅つきや今それがしも古郷入 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・11)・句稿消息

あこが餅くとして並べけり (文化十年)

出典 七番日記(文化10・12)・句稿消息・おらが春・自筆句集

餅曰にそれうぐひすよく (文化十年)

出典 七番日記(文化10・閏11)

もち搗や軒から首を出す鳥 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・閏11)・自筆句集

㊟ 七番日記・前掲句の次に出。

我宿へ来さうにしたり配り餅 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・閏11)・句稿消息・希杖本句集

㊟ おらが春、上五「我門へ」、座五「配餅」。稿本発句題叢、上五・中七「我門ニ来さうにしたり」。自筆句集、上五・中

七「我宿に来さふにしたり」。文政版発句集・嘉永版発句集、上五「我門へ」。類題集、上五「我門へ」、座五「餅配り」。

餅花の木陰にてうちあはは哉 (文化十年)

㊟ 七番日記(文化10・10)・志多良・句稿消息・おらが春・随齋筆紀・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟ 七番日記、上五「餅花のの」、座五「あはは哉」。志多良・句稿消息・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集、座五

「あはは哉」。随齋筆紀、上五「餅花のへの」、座五「あはは哉」。

餅搗や松の住吉大明神 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・12)

山本や狐の穴もくぼり餅 (文政二年)

㊟ 八番日記(文政2・12)

梅塵本八番日記(2)、座五「餅くぼり」。

かまけるな柳の枝に餅がなる (文政二年)

㊟ 八番日記(文政2・12)・文政二年十二月十五日付文路あて書簡・おらが春・だん袋・発句鈔追加

㊟ おらが春・発句鈔追加、前書「餅花」。だん袋、前書「もち花」。

餅つきや榎にかけし小てうちん (文政四年)

出典 八番日記(文政2・11)

㊦ 座五「小てうちん」。

餅搗や灯とどく角田川 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・10)

㊦ 中七「灯とどく」。

粟餅ももやうに並ぶ菴哉 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・12)・文政八年十一月二十日付草水あて書簡・文政九年一月十五日付梅堂あて書簡・発句

鈔追加

㊦ 発句鈔追加、中七「模様にならぶ」。

衣配

若松に雪も来よく衣配 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・12)

年忘

深川や舟も一組とし忘 (文化四年)

出典 七番日記(文化14・12)

㊦ 自筆句集、上五「两国や」。

年忘と申さへ一人かな (文政二年)

出典 八番日記(文政2・12)